

いもせやまおんなていきん

妹背山婦女庭訓

〔解説〕

明和八年（一七七二）大坂竹本座初演。近松半二らの合作で、全五段の時代物。当時衰退していた竹本座がこの作品の大きたりにより盛り返したと言われるほど、人気のあった作品です。物語は藤原鎌足親子による蘇我入鹿討伐を題材に、大和地方の伝説や謡曲、幸若舞曲などを取り入れ複雑な構成の大作となっています。

天智天皇の御代、蘇我入鹿は天皇派の藤原鎌足を失脚させ、自ら帝位につきます。入鹿は母が白い牝鹿の生血を飲んで生まれた為、超人的な能力を持っていましたが、爪黒の鹿の血と嫉妬に狂った女の血を混ぜ鹿笛に注いで吹くと、その力が失われるという宿命でもあり、ついにはその弱点を突かれて討伐されるのです。

〔花渡しの段 あらすじ〕

大和の妹山の太宰家後室定高と紀国の背山の大判事清澄は長年吉野川を挟んで反目しあっていましたが、定高の娘雛鳥と清澄の息子久我之助は恋仲です。久我之助が仕える天皇の寵愛を受ける鎌足の娘采女は宮中の混乱から逃れますが、采女を探入鹿は両家に疑いをかけ、雛鳥を入内させ、久我之助を自分に仕えさせよと、無理難題を命じるのです。

そして、互いを思いやる両家の思惑は川を挟んで行き違い、久我之助と雛鳥は若い命を散らすこととなります。

花渡しの段

奈良の都の八重九重、禁裏守護の太宰の館。入鹿公のお成りとて、ざゝめき渡る奥女中。召しに応じて大判事清澄、袴のひだも角菱ある、不和なる仲の定高が屋敷。互ひにそれと白書院、目礼もせずつつと通り

「入鹿公の御座の間へ、誰そ案内仕れ」

と、云ひ捨て、行かんとす。定高声かけ

「先づ暫く、珍らしや大判事殿、太宰の少式が跡目を預かる妾が屋敷。挨拶もなくお通りは女と思ひ侮つてか。たゞし武家の礼儀御存じなくば、ちつと御伝授申さうか」

と、詞の非太刀打掛捌き。騒がぬ清澄空嘯き

「少式存生より領地の遺恨により、この屋敷の内

へは今日まで足踏みもせぬ大判事。入鹿公のお召しによつて参つたは勅詔を重んずるゆゑ。皇居の間へ出仕の心。女童に用なければ、挨拶する口は持たぬ」

「イヤそれなればなほ以つて、今日入鹿様お成りなれば大内も同然。大判事に御疑ひのことあつて、この定高に吟味いたせとの勅詔。この詮議、済まぬうちは一寸も御前へは叶はぬ。お控へなされ清澄殿」

「ム、ハテ珍らしきことを聞く。君御詮議の筋あらば検非違使に仰せて、拷問あらんになんの御遠慮。もとより御疑ひ蒙るべき覚えなし。なまぬるき女の吟味受けるやうな清澄でない。御身見事詮議してみるか」

「オ、太宰の後家この定高が、きつと詮議してみせう」

「イヤ小癪な。そこ退いてはや通せ」

「まかりならぬ」

と根に持つ遺恨、互ひに折れぬ老木の柳。松の間の襖押し開かせ

「出御なり」

と警蹕の声に、二人も飛び退り、恐れ入つたるばかりなり。入鹿の大臣寛然と上段の褥より遙かに見下し

「ヤア大判事。未明より参内せよと、勅使を立つるに甚だの遅参。アレ見よ今日は午の上刻。流星南に出でて北に拱くするは、万乗の位に即くまろが吉星。それほどのこと知らぬ大判事でなし。たゞ

し、入鹿に仕へるが不足と思ひ、身を退かん下心か。緩怠なり」

ときめ付くれば

「コハ御諛とも覚えず、いま一天四海君の御手に属するとはいひながら、いまだ残党先帝に心を寄する族あつて帝都を窺ふ折から、われらが領地紀伊国は、西国南海の咽首にて大事の切所。弓を張り矢尻を磨くに隙なければ思はざる遅参。その上忠臣第一の大判事に、何事の御疑ひ」

と憚りなくぞ申しける

「ホ、その仔細といつば。先帝の思ひ者采女の局を、まろが后妃に定めんと行方を尋ね求めるところ、猿沢の池へ入水せし由。いかにしても合点行かず。察するところ采女が在処は、大判事そちが

よく知ろうがな」

と思ひがけなき疑ひに、清澄不審の眉をしはめ

「コハ存じ寄らざる儀。その采女の御事は、猿沢の池に捨身ありしとは、誰れ知らぬ者ござなきにわれらが行方存ぜしなどとは、なにを目当ての御仰せなるぞや」

「ヤアとぼけな。汝が倅久我之助は采女が付人ならずや。その親たるそちなれば、よも知らぬとは云はれまじ。サア真直ぐに白状せよ。陳ずるににおいては計ふべき旨あり」

「イヤのう大判事殿お聞きありしか。妾に仰せ付けられし詮議とはこのこと。サア覚えがあらば申されよ」

と云はせも立てず

「イヤ黙り召され。女の差し出るところでなし」

「イ、ヤ勅諭を受けての詮議なれば、勅答の有無によつて、その座はちつとも立たしはせじ」

と膝立直し詰め寄つて、双方挑み争ふたり。入鹿の大臣大口開き

「ハ、ハ、イヤ巧んだり拵へたり。定高が領分大和の妹山、清澄が領地紀の国背山。隣国境目の論により、互に確執せしとは表の見せかけ。内々には申し合はせ、故主の帝へ心を通はすおのれらと、わが眼力に違ひはせじ。さすれば天皇采女は両家の中に隠し置かんも知れざるゆゑ、大判事が詮議を申し付けた定高コリヤそちにもこの疑ひはかかるぞよ」

「これはまた君の勅諭とも覚えませぬ。夫少弐よ

り仲悪しき大判事殿。何ゆゑ申し合はさうやうもなし。私にまでお疑ひは恐れながら」

「云ふな女め。さほど音信不通の仲なるに、大判事が倅久我之助。そちが娘雛鳥と、密通いたしをるはいかに。イヤ知るまじと思ふか、倅どもが縁につながれたる汝らなれば、両方共に吟味は逃れぬ。なんと肝にこたへうが」

と飽くまで邪智の一言に、何思ひけん大判事、席を蹴立てて行かんとす。すかさず定高が刀の鐙むんずと取り

「コレ待ち給へ清澄殿。氣相変へてコリヤいづくへ」

「ヤアいづくへとは、親々が不和なる仲を存じながら、忍び逢ふ倅が不所存。引捕へて吟味せねば、

子供が縁を幸ひに和睦せしと云はれてはわが家の恥辱となる」

「オ、そりやこの方も同じこと。一旦は武士の意地。今更仲が直りたいばかりに娘にわざと不義させしと、世上の人に蔑せられては、過ぎ逝き給ふ夫へ立たぬ。妾も共に」

と裾引き上げ駆け出す二人を、はつたと睨め

「私の趣意に立ち騒ぐ尾籠やつ。汝らが倅の不義を吟味はせぬ。まろが尋ぬるは采女が在処。サア、いづれかなりと早く云え。なんと／＼」

「イヤ倅が性根はいざ知らず。采女殿の儀はかつて存ぜず。わが詞に偽りあらば弓矢神の御罰を受けん」

と刀すらりと抜き放し、てう／＼と金打し

「この上にも御疑ひあらば、いかほどの拷問なりとも、サア遊ばせ」

とどつかと坐す

「オ、妾とても少弐が妻。家に換へて采女殿はかくまはぬ。水責め火責めに逢ふとても、知らぬことは存じませぬ」

と詞鋭どに云ひ放す

「ム、しからば采女が詮議は追つて。先づ汝らが面晴れなれば、かくまはぬという潔白に、定高は雛鳥を入内させよ。また大判事も覚えなきに相違なくば、久我之助は今日より、朕が目通りへ出勤させよ。きつとその旨心得よ」

と、何がな探る当座の難題。二人は胸にぎつくりと、答へも暫しなかりしが、ヤ、あつて詞を揃へ

「かくありがたき勅詔を」

「互ひの子供が違背いたさば」

「オ、云ふにヤ及ぶ」

とあたりなる生け置く桜の一枝押つ取り

「得心すれば栄える花、背くにおいては忽ちに、まろが威勢の嵐にあて、マツこの通り」

と欄にはつしと打折り落花微塵。『はつ』とばかりに親々の心も共に散乱せり。なほもゆるまぬ大音声

「ヤア／＼弥藤次はやく参れ。汝は百里照の目鏡を以つて香具山の絶頂よりきつと遠見を仕れ。コリヤ／＼兩人よつく聞け。もし少しでも容赦いたさば両家は没収、従類までも絶やするぞ。性根を定めはや行け」

と急ぎ立つ上意に、親々の思ひは千々の胸の内。

見せぬ面に忠と義を張り詰めし氣のたゆみなく、
打ち連れてこそ出でて行く。誠に秦の趙高が馬と
欺く小牡鹿の入鹿が威勢ぞ類ひなき。

かかるところへ中門より追ひ／＼駆け入る鎧武者

「御注進」

と呼ばはつて、御白州に頭を下げ

「河内の国に武智郡司安彦、先帝に味方をして大
鳥の城に籠りしを、官軍残らず馳せ向ひ、敵を攻
め付け一昼夜に落城。大和に安曇の文次宗秀、当
麻の辺りに陣を取り、南都を攻むるその結構。馳
せ向かふて戦ひしに、味方の官軍利を失ひ残らず
敗北仕る」

と息つぎあへず言上すれば

「ハ、ハ、ハ、もの数ならぬ逆徒の奴ばら、朕馳せ
向うて微塵にせんぞよ。かの穆王が龍馬に勝れし
稀代の名馬、吉野の牧より狩り出したる、その馬
引け」

と広庭へ引き出ださせ、欄よりひらりと打ち乗り、
名馬の勇み。手綱はいくり、しと／＼。轡の音
はりん／＼。綸言誰れか背くべき。大地狭し
と馬上の勢ひ、刻む蹄も巷のこだま

「いそふれ、やつ」
と出陣の駒をはやめて

せきとりせんりょうのぼり

関取千両幟

〔解説〕

明和四年（一七六七）大坂竹本座初演。近松半二、三好松洛、竹田文吉、竹田小出雲、八民平七、竹本三郎兵衛の合作による全九段の世話物です。大坂堀江の相撲の人氣力士、岩川と千田川がモデルと言われ、猪名川、鉄ヶ嶽二人の義侠心、猪名川と妻おとわの夫婦愛が描かれた二段目の「猪名川内」「相撲場」が特に有名です。「夏祭浪花鑑」、「双蝶々曲輪日記」と並んで、大坂の人々の心の機微を描いた市井物の代表作となっています。

〔二段目 あらすじ〕

人氣力士猪名川は、恩ある商家鶴屋の若旦那礼三郎と恋仲の傾城錦木の身請金二百両の調達に苦慮しています。一方、その錦木に横恋慕する一原九平太は臍肩とする力士鉄ヶ嶽を使って錦木を身請けしようとするのですが、猪名川は思い止まるよう鉄ヶ嶽に頼みます。今日の取り組みが猪名川と鉄ヶ嶽であることがわかると、鉄ヶ嶽は「魚心あれば水心」と相撲の勝ちを譲るようにほのめかします。苦渋の選択を迫られる猪名川は、義理の為にはと涙をのんで勝ちを譲る覚悟をします。その時臍肩から二百両が届けられたと聞き、猪名川は一気に鉄ヶ嶽を倒すのです。しかし、その金は妻おとわが苦界に身を沈めて得た二百両だったのです。

猪名川内の段

芝居は南、米市は北、相撲と能の常舞台、堀江／＼と国々へ、鳴り響きたる猪名川が、角力の中は夫婦連れ、こゝに堀江の仮住居、店は初日の飾り物、半紙毛氈煙草盆、羽織脇差取^{とりまわし}、酒は杉生米俵、余所の軒端^{かりそめ}を仮初も賑々しくぞ見えにける。町中の最上肩も猪名川が、鉄ヶ嶽陀多右衛門と、打ち連れ帰る我が家の内

「フ、こちらの人戻らしたか。陀多右衛門様、ようお出で。初日からまだお目にかゝりませぬが、きつい大入で、お目出たうござります」

「アイ、そりやもふ互ひでござんす。見物の足が早さに、そろ／＼行かうと出かけた道で、猪名川に逢ふたによつて、それでちよつと寄りました」

「それはマア／＼ようこそお出で。したがまだ漸うと今の先、櫓太鼓を打ち出しました。マアゆるりとお茶なりとも」

と、会釈に汲み出す^{はなが}端香より、心の花香ぞ愛想あり
「コリヤ女房ども、留守の内へ今日の相撲割は来なんだか」

「イエ／＼まだ何にも持つては」

「ハテ埒の明かぬ。今まで知れぬは、何ぞもめでもあったかい。のう陀多右衛門」

「サイヤイ、俺も初日に鈍な相撲を取ったによつて、何でも今日とは思ふてゐるが、誰と合はず。相手によつては魂胆も、工夫もして見にやならぬ。いつそ聞きにやらうかい」

「ハテマアよござんす。その内には持つて来う。幸ひ貰ふた肴もあり、主と一緒に飯上^{はなま}がつて行かしやんせ。

ドレ、拵えう」

ゆうだすき

と木綿襷かけまく神にあらねども、菩薩廻りの女房

は、勝手へ立つて入りにけり

「猪名川様、お宿にござりまするか。新町の大坂屋から参りました。左右衛門申します。『錦木太夫が身請けの後金、今日中に遣はされませぬと、こちらに身請けの客衆がござります故、その方へ相談致します。が、お前のお顔を立てまして、今日中は待ちます。明日になったらこちらへ太夫をやります程に、その時いちむぢのない様に、念を入れい』と申されました」と云ひ捨て使ひは立ち帰れば

「ヤアその身請け、外へさして猪名川が立つものか」と駆け出すを

「コリヤ待てく、猪名川。その身請けの訳もその客も、この鉄ヶ嶽がよう知つてゐる程に、マア行かずと

もよいわいやい」

「ム、スリヤその身請けの相談を、われがよう知つてゐるか。シテその身請けの客といふは」

「イヤ、外でもない、俺じゃ。ヲ、この鉄ヶ嶽陀多右衛門じゃ程に、マアそう思ふて貰はうかい」

「ム、聞こえた。コリヤ九平太が腰じゃな。尤もわれがためには大事にかけにやらぬ人じゃ。が、こゝをよう聞いてたも。アノ錦木太夫は、俺が親方礼三郎殿とは、モきつう深い仲じゃ。その錦木故勘当まで請けられたこと、コリヤモウ云はいでも我が身よう知つてゐやることじゃ。そこらはまあ取つてほつて。五百両といふ金まで渡し、後金の二百両、才覚するその内に、太夫殿を外の手へ渡しては、どうも俺が顔が立たぬ。我が身が中へ這入ったこそ幸ひ、どうぞそつちの身請けを、じやみさす様に云ひ廻してたもるまいか。ヤコ

レ鉄ヶ嶽、頼む／＼」

「ヲ、この身請けはどうせふとかうせふと俺が儘じままや。われが頼む様にしてやる、と云ふたら勝手はよからうが、マア嫌じゃ。わりや恵海庵で九平太様をひどい目に合はしたげな。ヲ、強いこつちや／＼。その仕返しを頼まれてゐるこの鉄ヶ嶽。あんだらくさい事云ふない」

「ム、すりやその時の事が根葉になつて、それ故身請けの邪魔するのか」

「邪魔するとは何のこつちや／＼。錦木が身請けは金づくじゃぞよ。僅か二百両ばかりの金、団子の咽に詰まつた様に、ぎつちかは／＼と、吠え面かわくとは違ふて、七百両といふ金を、がらりと出して身請けするのじゃ」

「成程尤も。モ兎角銘々親方を、大事に思ふから起こ

る事じゃ。が、何とかうしてたもらぬか。どうぞ俺を九平太様に連れて行て、あなたの胸の晴るゝ様に、ぶたしなりと、又踏ましなりとさして、身請けはこつちへさしてたも。モ我が身の云やる通り、金づくの事なれば、今日中に後金さへ出来れば、頼む事も何もなければ、サちつと急には出来にくい。尤も在所へ云ふてやったら、工面の出来る事もあらう。が、親どもの耳へは入れとむない。それで我が身を頼むのじゃ。又折角身請け仕やつてからが、とても太夫が九平太様の女房にやならぬ。スリヤコレ畢竟が費えといふものじや」
ひつきよう

「黙れ／＼黙りやがれ。太夫が従はうが従ふまいが、それにや構はぬ。九平太様にや金がたんとある。サ小判がたんとあるによつて、その金でわいらが頬を、張つて／＼張り廻すのじゃ」

「サイノ、金で頬を張らずとも、この猪名川をどうなりと腹の居る様にして、どうぞ身請けをさしてたも。一生の頼みじや。恩にも着よ。コレ、手を下げる、鉄ヶ嶽」

「ム、そんなら何か、踏まれてもぶたれても、わりや云ひ分はないと云ふのか」

「イヤモウ、聞き分けてさへたもれば、譬へこの身はどうなつても」

「ハ、コリヤ相談が面白いわいハ、。九平太様の名代に、まちよつとかうせふかい。何じやい、何をびこ、さらすのじや。コリヤわりやたつた今、云ひ分はないと云ふたぞよ。但し、云ひ分があるかいやい」

「イヤサ、何の云ひ分があるもので」

「あるまい、何のあらうぞい。恵海庵での意趣返

し。わりや九平太様をかう喰らはしたか。ヤ、かう踏んだか。かう、」

と、弱みを付け込む厄病の、髪も頭も引きしやなぐり、苛む折から表へ息急き

「ハイ、今日の相撲割でござります。もう追っ付け土俵入りじゃ程に、早うお出でなされませ」

と書付ほり込み立ち帰れば、陀多右衛門押し開き

「何じや、鉄ヶ嶽に猪名川」

「ム、スリヤ今日の相撲は」

「コリヤ見い。俺とわれとが相撲じやといやい」

「ム、時も時」

「折も折」

「我が身と俺が立合ひとは、ハテ気味合ひな事じやの」

「コリヤ、われも池田の猪名川と云はれては、国々へ名の通った者。俺も又、大名のお抱へ。殊に大坂は初

めてなれば、この相撲しくじるが最後、扶持放れじゃ。
スリヤコレ、二人ながら大事の相撲。九平太様の名代
に、恵海庵の仕返ししたれば、この算用は済んである。
ガ又、錦木が身請けの事は、俺次第じゃ。ヲ、この
鉄ヶ嶽が心次第じゃ程に、魚心あれば水心。ナ、猪名
川、土俵で逢はう」

と、強い詞のどこやらに、味な鉄棒引きずる雪駄、ぐ
はら付かせてぞ

「コリヤ猪名川、今云ふた魚心あれば水心、必ず忘れ
てくれなよ。ハ、ハ、ハ、ハ」

出て行く。後に猪名川諸手を組み、思案にくれて居た
りしが

「段々日切りの切れた後金。親方が催促するも、九平
太が皆所為しわざ。兎角鉄ヶ嶽を抱き込んで、あつちの身請
けを廻して貰ふより外はない。と云ふても、一筋縄で

は行かぬ奴。抱き込む仕様は。ム、太夫が身請けは
俺次第。魚心あれば水心あり。ム、こりや今日の相
撲を、振ってやらざるまいわいの。ソレ、あれ
と俺とが立ち合ふこそ幸ひ。美しう振ってやり、あい
つに勝を譲っておいて、その上でのつ引きさせず、頼
むが近道上分別。とは云へ名取の鉄ヶ嶽、どう魂胆し
てなりとも、投げねばならぬ晴れの相撲。云はば一生
懸命の、大事の相撲を金故に、振ってやる猪名川が、
心の内のせつなさ汚さ。摩利支天にも見放され、相撲
冥加に尽きたか」

と、思はず拳を握り詰め、身を震はして男泣き。始終
立ち聞く女房が、涙隠して

「ヲ、こちの人とした事が、さつきにから飯拵えて
待つてゐるのに、こゝで上がるか。奥へ据えうか」

「イヤモ、飯なら喰ひたうない。ヤ、ホンニ相撲から

呼びに来た。ドレ、行て来う」

「コレ、待たしやんせ。ソレ、髪がきつう乱けてあるぞへ。人中へ見苦しい。結ふて上げう」

「イヤく、結ふてゐたら隙が入る。つい撫で付けておいてたも」

と、傍に直れば女房も、押しては云はぬもつれ髪、鬢かたえのほつれを撫で付ける、櫛の背より夫の胸つま、映して見たき鏡立て、映せば映る顔と顔

「申し、猪名川殿。色も青ざめ、そしてまあ、目の中も潤んで、どうやら気色の悪さうな顔付き。もう今日の相撲へは、断り云ふて行て下さんすな」

「何をあんだら尽くすぞい。いつはともあれ今日の相撲、鉄ヶ嶽とこの猪名川、初日の出ぬ先から町中が、待ってゐる晴れの出合ひ。何でも鉄ヶ嶽を、土俵の砂へ埋まにやおかぬ」

「イヤ、そりや嘘じゃ。今日の相撲は鉄ヶ嶽に、振つてやるお前の心」

「こりや声が高い。スリヤさつきにからの様子残らず」

「アイ、一間で聞いてをりました。僅かな金に手詰まつて、難儀さしやんすがわしや悲しいくわいな、いつそこの訳親父様に」

「たはけめが。それ云ふ程ならばこの様に、人に叩かれ踏まれはせぬわい。昔氣質の親父様、打ち明けて物云ふと、礼三様に異見の何のとやかましい。若いお人の水の出端。もし命生害になつた時は、ナコリヤ、千日に茹つた萱じやわい。ア、急な事でさへなくば、工面の仕様もあらうのに、僅か二百両の金故に、大事の相撲を振つてやらざるまいと思へば、不甲斐ないやら口惜しいやらで、おりや胸が裂ける様なわい」

「ヲ、道理でござんす、尤もでござんすわいな。モ

ウ、相撲取りを男に持ち、江戸長崎国々へ、行かしや

んすりやその後の、留守は猶更女氣の、独りくよ／＼

物案じ。夫に怪我のない様にと、祈る神様仏様、妙見

様へ精進も、戻らしゃんして顔見るまで、案じて夜を

寝ぬ女房の、今この切なる苦しみを、連れ添ふ私に云

はしゃんせぬ。お前はそれ程つれない」

と、女夫になった今までを、数へ立て数へ立て、恨み

涙に時移る、早追ひ／＼の呼び使ひ

「申し／＼、土俵入りでござります。早うお出でなさ

れませ。ちやつと／＼」

に是非なくも

「女房ども、行てくるぞや」

「エ、そんならどうでも行かしやんすか」

「ホ、鉄ヶ嶽を抱き込んで、二面通り行きや格別」

「もしも行かねば」

「絶体絶命」

「エ、」

「こりや。これが暇乞ひにならうも知れぬ。さらば」

とばかり一声を、後に残して出て行く

「ノウコレ待つて下さんせ。たった一言云ひたい事。

猪名川殿／＼」

と見れども後は雲霞

「夫の命に關はる大事。コリヤかうしてはゐられぬ」

と、帯引き締めて夫の後、慕ふてこそは

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承ください。